

# 梅之木通信

## 【縄文住居をつくる会】

第23号 2020.12.13 発行

### 4号棟の棟上げ&ジビエ料理で今年の締めくくり

なかなか垂木にする木材の調達が進まず年内にどこまで完成できるか心配されましたが、12日の作業では多くのメンバーの協力もあり、何とか棟上げまでたどり着くことができました。今回の7本柱の4号棟は、前回の4本柱の住居とは違い予想以上に大きく、垂木にする材木の本数もさることながら長さも必要となります。一回の作業で、一本の木材を伐採しては皮を剥く日々の連続でいつになったら垂木の設置が完了するのか不安が増していました。また、垂木も長さが必要となるため材木の曲りの影響も大きく、仮止めしてもまた梁から下して調整したり、垂木の根元を掘り直したりという作業を何度も繰り返すことになりました。12日には仮置きですが、門となる柱も立ててみて、やっと縄文住居の形らしくなってきました。梁が頭に当たって心配された事故？事件？もありましたが、今年一年大きな怪我無く無事に作業を終えることができ、ホッと胸をなでおろしています。



#### ❁ 棟上げの神事

棟上げとは本来、屋根の一番上にある梁を取り付けるところを意味するようですが、我々の住居では『垂木あげ』をおこなうことで代用します。垂木にする材木をみんなで運び、持ち上げて梁に掛けました。力を合わせて作業を行う事には変わりはありませんが、先ほどまでは、『こっち』、『そっち』・

『引いて』、『どっちへ』・

『山がわへ』、『どっちの山？』・

と船頭が多いとなかなか

まとまらず、指示が右往左往。

しかし、神事となると皆さん

今までと違って肅々と進めます。



## ❁ 火わたしの神事



たいまつ?の火を運んで住居の炉に移します。

やはりこれは女神の仕事?

火を熾すことが大変だった時代であれば、また火を絶やさず受け継いでいくことも大切なことだったに違いありません。



世の中いろいろなものが便利になり当然と思っていることも、一つ一つが重要な要素であることに気づかされます。古来より火を神聖なものとして取り扱ってきたことも理解できる気がしてきます。

## ❁ 熊さんの祝詞

いつもながらの熊さんの祝詞、二礼二拍手一礼にて儀式は終了。これまでの作業の無事を感謝するとともに、これからの作業の安全を祈願して、神事は無事終了となりました。



## ❁ おまちかねのジビエ料理



今年は、埋蔵文化センターの『ジビエの会』に参加しての打ち上げとなりました。

イノシシ肉、栗、キノコの煮込みと鹿肉、イワナ、キジ肉のジビエ料理に、作業の合間に準備した焼き芋をいただきます。もちろんソーシャルディスタンスを保ちながら・・・佐野さんから、山ブドウのジュースや、ニワトコのシロップの差し入れ。初めての味にも出会い、作業の疲れも忘れて楽しいひと時を過ごせたのではないかと思います。



これで、暫く作業ともお別れかと思うと少し寂しさも感じますが、来年まで、体力と英気を充電する期間としていただければと思います。

来年は、3月から活動再開の予定です。作業開始時期が近づきましたらまた作業予定の案内をいたします。今年はお孫さんたちともあまり会えず、集まる人が少ない寂しいお正月になるかもしれませんが、こんな年もあまりないことと考え、静かなお正月を過ごしてみると新たな発見ができるかもしれません。4号棟の後にも、あと2棟の建設予定があるようで、『次は高床式住居』と聞くと、新たな意欲が湧いてきているのではないのでしょうか。皆さん、もれなく高齢者の範疇に分類されていますので、くれぐれも新型コロナ対策を施してこの冬を乗り切っていきましょう。